

## 地域学実習における流域圏を対象とした課題の設定と成果

○一色健司(高知県立大学地域教育研究センター), 木下敦子, 和田剛(高知県立大学地域連携課)

### 1. はじめに

高知県立大学は、「域学共生」の理念のもとに、教育・研究・地域貢献に取り組んでいる。教育においては、全学必修科目である地域学概論、地域学実習Ⅰ、地域学実習Ⅱに加えて地域課題を題材とする共通教養教育科目や専門教育科目、チームの中で専門職者が連携するためのスキルを養成する科目、実際の地域課題解決に取り組む科目である域学共生実習を開設している。そして、所定の科目を履修して卒業した者に対して、「地域共生推進士」の称号(高知県立大学独自称号)を授与することとしている。

本報告では、これらの科目の中の「地域学実習Ⅰ」について、そのねらいと特徴、課題設定の方法等の概要を報告し、流域圏を意識した課題設定、流域圏の視点を取り入れることによって実習の効果を上げる可能性、そして、実習の中で得られた予期していなかった成果を報告する。

### 2. 地域学実習Ⅰのねらいと特徴

「地域学実習Ⅰ」は、入学初年次の学生を対象とした必修科目として2015年度に開設した科目である(ただし、文化学部の夜間主コースのみ選択科目)。毎年三百数十人の学生が24の課題に所属して、地域での3日間の現地活動を含む実習に参加している。近年、多くの大学が地域活動を含む実習科目を開設しているが、在学生全員に必修科目として課している事例はほとんどなく、多くの大学から注目されている。

この科目は、地域活動の経験が十分でない学生に、地域課題と向き合うことの重要性を理解させ、地域課題に取り組んでいる地域の人々の熱意と努力に触れさせ、その後の学びや卒業後の専門職者としての活動の中で地域課題への取り組みの指向性を醸成させるために開設した科目である。したがって、(1)地域課題を体験・実感すること、(2)課題に取り組んでいる地域の方の熱意に触れること、(3)これらを各自の問題意識や学びの動機付けに結びつけること、が主なねらいである。

### 3. 地域学実習Ⅰにおける流域圏を対象とした課題の設定

「地域学実習Ⅰ」の課題の設定方法には大別して、(1)域学共生コーディネータ(和田, 木下)が設定する、(2)教員からの提案に基づいて域学共生コーディネータと協議して設定する、(2)域学共生コーディネータの提案に基づいて当該提案内容に関係の深い教員と協議して設定する、の3つのパターンがある。2016年度に実施した24課題のテーマ、対象地域、流域圏の視度の関わり(本報告者一色が分析したもの)を表1に示す。本報告者(一色)が提案協力者あるいは実施担当者としてかかわった課題では流域圏の視点を入れるように実習課題を設定したが、他の課題では必ずしもそのような視点が意識されているわけではない。

### 4. 実習の成果と発展の可能性

地域学実習Ⅰでは、課題ごとに受講者が報告書とプレゼンテーション用ポスターを制作することを必須要件としている。報告書の重点は「この実習を通して得たもの」という小論文である。一方、プレゼンテーション用ポスターは当該実習の概要と成果をA0判1枚の大きさで実習関係者、在学生、本学来訪者に閲覧させるためのものである(学術集会の発表用ポスターに類似したもの)。このうち、報告書中の小論文を分析することによって、実習の目的をどの程度達成することができたのかを評価することができる。本報告では、実習の全般的な評価ではなく「流域圏」の視度がどの程度浸透・理解されているのかという点から行った評価を簡潔に報告する。

まず、日本の都市部に居住する多くの人にとって河川は非常に身近な生活環境であるにもかかわらず、ほとんど注目されていないという点である。たとえば、鏡川流域の課題(表1の課題番号5)では河川とその周辺の状況の観察記録を作成させた。その際、観察記録の観点をあらかじめ指示した。ほとんどの実習学生は観点に沿って正確な記録を行っていたので観察能力は十分にあると思われるが、身近な河川をそのような観点を意識して観察したことはなかったとのことである。

次に、上流で河川を利用している人たちが、中下流の河川利用者のことを意識して水質や水環境の保全に気を遣っていることがたいへん印象に残ったという感想を残している点である。下流域の居住者が流域圏という視点から河川をとらえることができれば、それぞれの流域において何が重要であり、流域の居住者がどのように連携・協力すべきなのかという観点から、河川をとらえることができるようになると思われる。

最後に、当初、流域圏を主たるテーマとしない実習において発見された「地域のお宝」を紹介する。構原町

大向地区での実習(表1の課題番号21)において、地区集会所に保管されている地元の方が作成した資料を見せていただいた。その資料は、地区内を流れる構原川の特徴的な場所\*箇所\*に命名した上で写真と簡潔な説明を添えた冊子であった。地区内を流れる川が地区での生活に深く溶け込んでいることを示す貴重な非公開資料である。このような埋もれたままになっている貴重な資料が他の地区にもあるのではないだろうか。今後の地域学実習の中で「発掘」できることを期待したい。

## 5. まとめ

社会的にも歴史的にも、農山村の集落は河川の流れの筋に沿って形成されてきており、農山村間あるいは農山村と都市との間の物流や人的交流も河川に沿ったものが主役となる。したがって、流域圏は人的物的交流の幹をなす圏域であるということが出来る。また、近年強調されるようになった「山、川、海のつながり」は、流域圏そのものである。したがって、中山間の農山村における地域課題を対象とするとき、そこに流域圏という視点からの人的物的な繋がりを意識することによって、ある特定の地域だけでは見えてこなかった課題解決の糸口が見えてくるかも知れない。このような視点から地域学実習Ⅰの課題をあらためて検討してみると、表1に示したように、流域圏を主題とする課題以外にも流域圏の視点から捉えることが可能な課題が少なくない。流域圏の視点を加えることによって、課題を特定の地域(点)のものとして捉える視点から、線、面による地域のつながりの観点から捉える視点を得て重層的な課題のとらえ方や解決の指向性を得ることを目指したい。

**謝辞:**表1中の地域学実習Ⅰの課題のうち、課題9は風間裕氏(高知県立大学総合情報センター准教授)の提案によるものです。ここに記して謝意を表します。また、地域学実習Ⅰの実施において、各課題の担当教員の適切な指導・引率と地域の団体や地域の協力者のご理解とご協力が不可欠でした。あわせて謝意を表します。

課題番号	課題名	対象地域	流域圏との関わり※
1	減災・防災・震災復興に向けた「未災地ツアー」	高知市三里地区	△(津波災害)
2	昔の海辺の暮らしや賑わいを知り、地域資源や環境・防災の視点から今とこれからを考える	高知市御豊瀬地区	
3	社会的排除に取り組む「子どもの居場所」作り～コミュニティ・ジェンダー・子ども～	高知市	
4	「はりまや橋小学校区」の地域の魅力と地域コミュニティ再生の重要性と意義について考える	高知市はりまや橋小学校区	
5	鏡川を歩いて下りながら、高知市の水資源環境について考える	鏡川流域	◎
6	高知市の中山間地域の課題を知り、交流人口拡大にむけた様々な取り組みを学ぶ	高知市土佐山地区	△(流域環境保全)
7	減災・防災・震災復興に向けた「未災地ツアー」	安芸市川北地区	△(津波災害)
8	地域の伝統行事に参加しながら行政職員の地域担当職員制度による地域づくりを学ぶ	安芸市奈比賀地区	
9	四万十川をカヌーで下りながら、流域の観光活性化について学ぶ	四万十川流域	◎
10	塩の道を歩き地域で育まれてきた歴史文化を学ぶ	香南市～香美市	△(川沿いの道)
11	高知県の森林環境を学ぶ	香美市(高知県森林研修センター)	△(森林の役割)
12	猪野々地区で行われた「皿鉢の盛りつけ教室」の再現と記録	香美市猪野々地区	
13	中山間地域の祭りに参加し、地域行事の持つ意味や、中山間地域に移住してきた方の日常を学ぶ	香美市物部久保地区、佐川町尾川地区	△(川の魅力)
14	日本最小人口の村*大川村の地域づくりを考える(*離島を除く)	大川村	
15	伝統野菜である田村蕪による地域活性化の取り組みを学ぶ	仁淀川町田村地区	
16	「金子直吉ゆかりの地」しもなの郷の魅力を探り発信する	仁淀川町名野川地区	○(川の幸の活用)
17	餅まきの文化と米農家の課題を学ぶ	中土佐町大野見地区	
18	住民と行政が協働で進める健康づくりを学ぶ	佐川町加茂地区	
19	越知町の商店街の昔のにぎわいと今を知り、これからの地域の活性化について考える	越知町	
20	集落活動センターの取り組みを体験する	構原町初瀬地区	
21	地域のお宝を見える化する	構原町大向地区	△(豪雨災害)
22	みそ道場の復活に関わりながら、地域の食文化を学ぶ	津野町久保川地区	
23	四万十源流の里、津野町船戸地区の魅力を再発掘する	津野町船戸地区	○(流域環境保全)
24	中山間地域の運動会に参加し、地域行事による地域社会の再生・活性化について考える	津野町、大川村、香美市	
※ ◎: 流域圏を主テーマとする課題			
○: 流域圏に関するテーマを含んでいる課題。括弧内は流域圏との関わり。			
△: 流域圏をテーマに含めることが可能な課題。括弧内は流域圏にかかわる設定可能なテーマ。			